

## 日本史学域 課題レポートの講評

課題として選定したテキストは次の二つでした。

### (課題テキスト)

網野善彦 1991『日本の歴史をよみなおす (全)』ちくま学芸文庫

都出比呂志 2000『王陵の考古学』岩波新書

この二つはいずれも重要な研究ですが、一般向けに分かりやすく書かれたものです。ですから、皆さんにとっても難しすぎることはなかったと思います。提出された皆さんのレポートを読んでいても、おおむね、内容を理解できていることが分かりました。

ただし、いくつか気になることがありました。

テキスト二つのうち、一つを選択してもらったのですが、どちらのテキストを選択したのか、きちんと明示せずに論述している学生が目立ちました。読めばわかるのですが、きちんと明示すべきでしょう。

また、書き始めは文頭を一字あけるという基本的なことがなされていないレポートが目立ちました。このような書き方は一般的にも見られますが、日本語の正式な書き方ではありません。少なくとも、大学のレポートにはふさわしくありません。書式は守るべきです。また、参考や引用をする場合、書名を上げるだけでなく、そのページ数も上げるべきです。それが出来ているレポートはわずかでした。高校の授業では習わないことなのかもしれませんが、今後、大学のレポートでは大切になります。

文庫本・新書といえども、一冊の本を僅かな字数で要約することは難しかったと思います。大半は適切に要約されていましたが、中には単なる箇条書きの羅列に過ぎない「要約」もありました。そのような形だけの「要約」は、内容を機械的に圧縮したため、文脈の通った文章になっていません。具体例の「要約」だけで終わり、著者の主旨を読み取れなかったように見えます。著者の主旨こそ、簡潔に示すべきでしょう。

ところで、引用の連続で、自己の文章がほとんど確認できないレポートが僅かにありました。そういうスタイルの文章もありますが、大学のレポートとしては、ふさわしくありません。剽窃、もしくは盗作と判断されます。「写す」のではなく、主旨を理解し、自分の言葉で論理的な文章で表現してほしいと思います。「教科書を覚える」ような「勉強」ではなく、論理的な思考能力を養うのが大学の講義です。一般的な常識を超える歴史叙述に初めて触れ、それにきちんと対応して懸命に考えたレポートがある反面、内容の機械的な圧縮と、著者の理解に引っ張られただけの「自分の考え」を論述しているレポートが目立ちました。ぜひとも、深く考えてください。

そのためには、課題テキストに加えて、G・H・カー『歴史とは何か』(岩波新書)を読むことを勧めます。古典的な名著です。今も古びることがありませんが、実は著者は歴史学者ではありません。そのことも、歴史の奥深さを教えてくれることです。入学後、何年かかかるかも知れませんが、『歴史とは何か』の意味は、研究を深めるほどに重要なものになってくるはずです。